



大分県別府市

面積125.15平方キロ、人口約12万6,000人。別府、浜脇、観海寺、堀田、明礬、鉄輪、柴石、亀川の8つの温泉地を有する。温泉は地熱発電、花卉栽培、医療、美容など幅広く活用され、主要産業の一つになっている。JICAの地域別研修「地域資源を活用した地域振興・地場産業活性化のための開発手法」コースでは、立命館アジア太平洋大学が受入機関となり、地元団体としてNPO法人ハットウ・オンパクが協力。

別府の伝統と新しさを 楽しめる見本市

一歩足を踏み入れると、あちこちに白い湯気が立ち上る大分県別府市。日本一の湧出量を誇る別府八湯は、誰もが認める世界有数の温泉地だ。観光客は年間約1000万人。しかしバブル崩壊後、その数は急速に落ち込んでしまった。

別府に何とか元気を取り戻したい。住民たちはその思いを一つにして立ち上がり、1996年（平成8年）8月8日午前8時8分8秒に「別府八湯勝手に独立宣言」を発表。8つの温泉地それぞれが個性を見直し、競い助け合いながら、新しい地域づくりを始めようというのだ。

そして2001年から、この取り組みを発信する場として開催されているのが別府八湯温泉泊覧会（通称オンパク）。博（泊）覧会、といっても会場は一つではない。別府市全域が舞台となり、約3週間にわたって100以上のプログラムが行われる地域体験交流型の大見本市だ。スローガンは「楽しい」「おいしい」「きれい」。NPO法人ハットウ・オンパクが旗振り役となり、地元のホテルや温泉旅館、NPOなどの地域づくりグループ、喫茶店やギャラリーなどが総出で、多彩なプログラムを企

イスで、いろいろな可能性があることを知りました」との安波さんの言葉に、研修員たちは深くうなずいていた。

約2週間かけて、別府市のさまざまな取り組みを視察した研修員たち。ラオス生産貿易振興省のチャライン・ソウニチャンさんは「住民の皆さんが一体となって、地域開発に取り組んでいる姿勢が素晴らしい。これが成功の秘訣ですね。時間がかかるかもしれませんが、私も根気強く周りを説得し巻き込んでいきたい」と意気込んでいた。

「オンパクを成功させるためには、成功の喜びを皆で分かち合えることが大切です」とハットウ・オンパク理事の野上泰生さん。日本の温泉地の地域づくりを世界へ。「オンパクの手法」を通して、世界各地でたくさんの方が可能性を発掘されることを期待したい。

“オンパクの手法”で 地域の可能性を広げよう

8つの温泉地を有し、毎年多くの観光客が訪れる大分県別府市。2001年から開催されている「別府八湯温泉泊覧会」が、新しい地域づくりの手法として国内外から注目を集めている。

【大分県】

別府市



やなぎ茶屋 来楽良ではだんご汁づくりに挑戦。豊かな自然に囲まれ、新鮮な野菜のおいしさがより引き出されるという

画する。

オンパクは、草の根レベルの人材育成と地域資源の発掘の場でもある。好評を得たプログラムの多くが、日常的なサービスにつながっているのが特徴だ。このオンパクをモデルにした地域開発は日本各地に広がり、今では全国10カ所で実践されている。

「オンパクの手法」は、開発途上国にも応用できるはず。JICAは今年から立命館アジア太平洋大学と協力して、別府を舞台にした研修をスタート。10月末からインドシナ、太平洋地域から13人の研修員が訪れ、別府市で地域づくりの手法を学んだ。

温泉の蒸気も 観光資源に活用

最初に向かったのは、市の中心から車で約15分、柳隠山地区にある「やなぎ茶屋 来楽良」。美しい棚田が広がるこの地域は、豊富な野菜の生産地として有名だ。これに目を付けた店主の永井實千代さんは、地元の野菜をふんだんに使った料理をふるまう。オンパクには7年前から参加している。

この店で研修員たちは、人気プログラムの一つ、大分郷土料理の「だんご汁」づくりに挑戦した。「大切なのは楽しみながらやること。お客



大黒屋のご主人・安波さんの説明に聞き入る研修員たち。温泉の蒸気を吸ったプーデンピリアが鮮やかなピンク色を放つ



大黒屋の敷地内には、観光客が調理を体験できる地獄釜がある



柳隠山地区に広がる棚田を眺めながら、別府市に自分の国の状況を重ね、新しい地域開発の手法を模索する研修員たち



入舟荘の女将・後藤美鈴さん(中央)の案内で、鉄輪温泉に残る昔ながらの湯治宿を視察。「鉄輪の良さを知ってもらうため、地域ぐるみで頑張っています」